

## 『虞美人草』漱石の『マクベス』応用

Junko Higasa 2013.10.3

『マクベス』第一幕第一場に「Fair is foul, and foul is fair」という魔女のセリフがある。これは直訳すると「良いは悪い、悪いは良い」あるいは「奇麗は汚い、汚いは奇麗」となるが、漱石はこれを『虞美人草』第十六章で、外交官試験に受かった宗近君の台詞に応用している。『西洋へ行くと人間を二た通り拵えて持っていかないと不都合ですからね』『不作法な裏と、奇麗な表と。厄介でさあ』彼の父が応える。

『日本でもそうじゃないか。文明の圧迫が烈しいから上部を奇麗にしないと社会に住めなくなる』宗近君と父が問答する。『その代り生存競争も烈しくなるから、内部は益ますます不作法になりまさあ』『丁度なんだな。裏と表と反対の方向に発達する訳になるな。…』

これは体裁や面目を保つために、自らは正直に動かず、相手が自分の思うところに動くように仕向ける藤尾の母や、内面と表面が違う「紳士」である小野さんのような、20世紀文明社会の新しい生き方である。表面を穏やかにすればするほど、内面に不満が鬱積するから、必然的に心は汚くなる。逆に表面を繕わないほど内面は奇麗である。即ち「奇麗は汚い、汚いは奇麗」である。そのように裏表がそれぞれ反対方向へ発展するのが文明社会ということだ。

これを21世紀風に言うと「キレる」となる。この鬱積が「キレた」時の最悪の結果が戦争である。